

麓の浦代峠は櫻の名所として知られていました。

○ 沖黒島

浦代からニ科ある無人島で全島原始林におおわれ、タブ、シイ、アオキ、ヤブデ、ツバキなどがジャンガルとつくり、頂上附近にビロウ樹が自生しています。

○ 伝説の「粟島樺」、砂浜に清水湧く「丸井戸」、魚供養の「魚鱗塔」などもあります。

佐伯市、鶴見町、米水津村の三者一体による「鶴見スカイライン」のビジョンが、誌題に力取りつてあります。

(参考資料)

年表

年号	記事
明治二十六年	国木田独歩元越山に登る(十一月五日、三十三歳)
〃	独歩鶴見半島遊覧(十二月二、三日)
〃 二十七年	独歩元越山に又登る(四月二十二日、三十四歳)
〃 二十八年	独歩小説「旅辨」發表(二十八歳)
〃 三十四年	水の子燈台起工
〃 三十七年	竣工(工費二万四)
昭和十一年	平田幸市氏鶴見半島縦走(とのお)
〃 二十六年	水の子燈台、無人燈台となる。
〃 四十四年	佐伯史談会員、鶴見半島史跡巡り
〃 四十五年	佐伯市、南海部郡地域開発促進協議会、会長、高山善吉佐伯商工会議所会頭、鶴見スカイラインについて話し合い。

(つづく)

見学記

大野川流域の

石造文化財を視るの記

佐伯市文化財調査委員

伊賀重雄

小雨降る三月十五日、私達文化財調査委員一行は、竹田市玉来の扇森翁神社の参詣と、大野川流域の石造文化財に出かけることになった。

午前八時弥生所を出発、途中先ず大野郡千歳村長迫所在の石塔群を見学した。この石塔群は部落の東のほうに国道二〇五号線が古い古手の丘陵上におり、交通の便のよい処にある。

石段を上ると正面に胎藏界の大日如来の坐像が、岩肌をくつて出来た龕(ガン)の中、岩壁に彫彫で陽刻されたその上を粘土細工で作像している。粘土細工の作像は初めて見た。坐像で高さ四米もあつた程の大きなもので、作像年月は定かではないが、室町時代中期のものと思われる。

この坐像の両側に五輪塔四基と、空蓋印塔一基があるが、いずれも缺損の多い完全な形で遺され、特に空蓋印塔は小型で目立つが、姿が秀逸である。いずれも室町の中頃から後期に分けての造塔と想像されるが惜しいことにこれと証する銘文がなく、はつきりした製作年代はつまびらかでない。

雨の中を長辺の石塔群に別れを告げ、午前十時半扇森稲荷(俗に言ふ狐頭さま)に参詣して、今年的一家安全と祈り、十二時すぎ朝地町の普光寺登崖仏を見る。住職の

御意でお茶の接待にあずかり、ここで辨当を調く。住職は白濁若宮八幡の錯方官司とは旧知の中で、法伯周辺のことなど色々ときかれる。又私達の賢利にも狭く終えられ、特に平地がラン、山地がランのちがいなど、仏教の草創について語られた。

普光寺の磨崖仏は小さな山峽を二分して、一方に寺院が立ち、対岸の懸崖に磨崖仏が刻まれてある。一見して宇佐郡内村の龍岩寺の奥の院の形式と思ひ出し、よく似たたたずまいだと思つた。奥の龕（カン）の中は不動五菩薩が祀られ、中央の龕の中には金剛界の大日如来像が刻まれてある。一番手前の岩壁には、扉下でも大きい部類に入る大不動明王の坐像が刻まれている。

私はここで宇佐、国東の寺院形式と似たことに就いて、宇佐の大官司であつた大神氏がその職を逸れ、大野地方に住みつき、六御満山に依つたまゝこの周辺に創り始められたことが、この標立遺跡を大野川上流地域に残したものでないかと、私は私にそかに考へてゐる。識者の御教示を乞ひたいものである。

この普光寺の磨崖仏の製作年代はいづれも鎌倉初期だと住職は語られたが、年代を証する一片の銘文もない、しかしこの磨崖仏は県指定の文化財である。

寺の庭一面に水仙が植栽され、寒さに耐えて白い花が咲きほこり、この地方の在り方を示す一つの風情を以て感して、立ち去り難い思ひがした。

第三の見学は大野町菅田所在の磨崖仏で、そのかみ、この草深い山里に草庵と結んで後世のために作像されたもので、薬師如来を中心に八体の地藏姿の仏体が刻まれている。新大野町の中は当時、時代相がうかがわれ、益田先生は室町初期のものではないかと語られていた。つぎは今日最後の訪問地である大野町中道にある、城

井越前守の墓所である。

墓碑には正面に

城井越前守大神惟勝之墓

と誌され、碑側には、

遠祖越前守君其先大神之支流而世々輩前城井之土着也依之以城井為君後住豐後大野郡明徳二年八月辛子同郡中道村然 季歴明徳二季今茲距文政八年四百三十有五年矣星霜久其墓石頽側遠孫惟徳、惟定守前 建石而築墓石永享祈祭祀伝於千載云爾

維新文政八年乙酉秋

とあり、榊宗礼城と関係がある惟勝とは同名異人であり、一段輩前の城井に住し、その後大野庄に住つたことを銘文は説明している。大神の支流であることは間違がなく、巴の紋が附近にある城井一族の墓石に刻まれている。

今日の研究は雨のため予定の三分の一しか出来なかつた、佐伯の毛利氏のことについてはその出自はほぼ明らかになっているが、佐伯氏のことについては、大部分が歴史的研究を餘儀なくされている。今後の研究はこの緒口を大野町、新地町、緒方町の大神氏出自の地域に求めて進めてゆきたいと念じてゐる。

旬終と終り野津所に帰り、薄暮の風蓮鐘乳洞を見学した。新開に報道があつた標に、洞内の鐘乳石は押し穿せられた観音像によつてその先端は欠損して、人の連んを成す薄黒くよごれて居る。文化財の保護もたを見せる大抵でなく、欠損を防ぎ塵埃から守る対策が必要と思つた。

午後五時すぎ、今日一日不安な文化財研修の旅を終えたことと感謝しながら、福生町に帰着、それく、家路にいらしたのであつた。